研究報告

視覚障害者の余暇利用に関する研究

永 松 義 博*

A Study on the Utilization of the Park for the Blind

Yoshihiro NAGAMATSU

摘要: 点字調査により、戸外での運動、遊びの領域等について調査を行なった。彼らの戸外活動への志向性は高く、組織的で活動的なスポーツが好まれ、盲児ではリズム的な要素や触覚的な遊器具を使つての遊びが大半となる。盲人女子では消極的な態度がみられ、室内での遊びが多い。彼らの活動の場としては盲人施設、盲学校校庭といった身近な周辺空間であり、基本的には友人との交友を伴つて遊びが展開されていることが理解される。

1. はじめに

視覚障害者にとって、遊びや運動、レクリエーション等の戸外活動は、より豊かに成長していく上で、重要であり、又、感覚機能の向上、コミュニケーションの成立上からも、意義がある。

しかしながら、視覚障害者は、一般に、社会性に乏しく、生活行動の範囲も狭く、非常に限定された行動範囲、行動時間であり、戸外での遊びや運動の、時間も種類も少なく、従つて、屋内で静かに過ごすという生活実情であり、日常生活の行動や態度が、消極的なものとなっている。

視覚障害は、運動能力を著しく低下させ、行動圏を大きく制限しているが、こうした傾向は、視力障害と同時に彼らが十二分に運動し、行動できる場が、与えられていないところにも原因している。

視覚障害者にとっての、環境づくりは、こうした視力欠損からくる、ハンディキャップを、十分に理解し、考へていく必要がある。

本報告では、特に、彼らの余暇利用の実態を分析することから、限られた中での、彼らの遊び生活、戸外活動への志向等について理解することを、目的としたものであり、快適に適応できる屋外生活空間を、計画していくための、手がかりとしたい。

2. 調査概要

調査対象施設は、全国50校の盲学校、盲児施設19箇所、盲老人施設29所、中途失明者更生施設、盲人協会

26箇所の、各盲人施設を対象として、調査用紙を配布した。

対象者は、全盲者3,842人、準盲者1,227人、弱視者3,130人の合計8,199人であり、点字による選択、及び、記述式の調査である。

調査内容は、盲人の一般的な余暇時間の活用実態、運動への志向性、戸外での遊びの種類、戸外活動の場、屋外活動の阻害要因、余暇時間保有量と遊びの領域等について、それぞれ、属性毎に、年齢、障害等級、男女別に特徴をみてみたものである。

3. 調査結果及び考察

(1) 余暇活動について

(a) 余暇時間の活用

視覚障害者の余暇時間の活用実態（休日における余暇時間の過ごし方）を、全盲者、準盲者、弱視者について男女別にみてみたのが図一1、図一2である。

図一1、盲人男子の全盲者をみると、テレビ、ラジオ、休養が、ほぼ同等で最も多く、次の音楽を2倍以上も上回っている。

一方、準盲者および弱視者をみてみると、最も多いのは、散歩、外出、買物であり、テレビ、ラジオ、スポーツが、同等程度で、それに続いている。

全盲者と準盲者、および弱視者との間における、最も大きな相違は、次の2点である。

第1点は、全盲者の遊びが、テレビ、ラジオ、休養に集中し、他の遊びにあまり参加していないのに反し、準盲者および弱視者の遊びは、比較的広範囲にわたって参

* 久留米農芸高校

図一 余暇時間の活用（盲人男子）

図二 余暇時間の活用（盲人女子）

加している点であろう。

第2点は、全盲者の遊びが、非常に静的であるのに対し、準盲者、弱視者の遊びが、かなり動的な点である。

図一2は、盲人女子の状況であるが、基本的には、盲人男子と同様の傾向を示しているが、若干の相違点としては、盲人男子が、盲人女子に比べ、散歩、買物等の外出行動の割合が高く、又、スポーツに対する関心も、高いことである。

視覚障害者は、晴眼者に比較して、疲労の度合いが高いことからいえようが、全体的にみて、休養やぼんやり

と過ごす例が多く、ラジオ、テレビ、音楽等を聞き、余暇を過ごしているという生活態度であり、積極的な行動がみられず、十分な時間の活用がなされていないことがわかる。この傾向は、先天性の全盲者、盲人女子に顕著にあらわれている。

(b) 趣味

盲学校生徒を対象に、趣味について、全盲者、準盲者、弱視者の、それぞれ男女別に、特徴をみてみたのが、図一3である。

盲人男子の全盲者に着目すると、一番人気のある遊び

は、音楽である。その他、テレビ、ラジオ、あるいは、ギター等の楽器演奏といった、聴覚的要素を利用したものが多い。

しかし、準盲者、弱視者に移行するにつれて、スポーツ、収集、遊戯といった、動的遊びへの嗜好がみられるようになる。

なお、中学部、高等部の、準盲、弱視者の男子では、

動的なスポーツに対する興味、関心が高く、弱視者では32.8%と、最も高い割合を示していた。

盲人女子では、音楽、ラジオ、テレビ、映画、演劇が主たるものであり、フォークダンス、スポーツ、手芸、収集、読書等、盲人男子に比べ、静的な事柄が多くなっている。

全体的にみて、全盲男子の音楽、準盲女子のスポーツ

図-5 戶外活動への志向性 (盲学校全盲者)

が、圧倒的な人気であり、他を大きくひき離している。

また、趣味の種類は、比較的限られたものとなっているが、傾向としては、全盲者一準盲者一弱視者になるにつれ、趣味の種類も増加している。

一方、無回答、趣味なしの割合も高く、物事に対する興味のなさ、無関心の度合も高くみられ、無気力な生活状態が考えられる。

(c) 盲学校におけるクラブ活動状況

図-4は、盲学校における、体育クラブの入部状況を示している。

図から理解されるように、体育系クラブにおいては、盲人男子の部活動は活発である。特に、盲人野球では、

図-6 戶外活動への志向性 (盲学校全盲者)

46.1%と極めて高い入部率が認められ、次いで、盲人卓球、陸上、柔道と、動的なスポーツに、興味ももたれていることもわかる。

盲人女子についてみると、盲人バレーボールに人気が集集中し、それは、盲人野球に占める盲人男子の割合と、ほぼ同値の46.2%である。その他、盲人卓球、バトミントン、陸上等の入部数が、多くみられる。

なお、盲人女子の場合、体育クラブに比べ、文化系クラブの入部が多く、特に、音楽、合唱クラブ、ブラスバンドの活動はめざましい。その他、家庭クラブ、茶華道、点字、手芸といった、直接実生活と結びついた活動が目立っていることがわかった。

(2) 戶外活動について

(a) 戶外活動への志向性

視覚障害者の屋外での遊び、運動の好悪 (戶外で遊んだり運動したりすることが、好きか嫌いかな) について、意識調査を行なった結果、図-5、図-6を得ることができた。

図-5は、盲学校の小学部、中学部、高等部における全盲人男女の、戶外活動への志向比較である。戶外活動への志向は、全体的に高く、特に、盲人男子では70%と極めて高い比率が認められ、屋外での遊び、運動を好む

という結果が出ている。盲人男子は「好き」という回答の割合が、盲人女子に比較して22%程度多く、戸外活動への積極的な動きがみられる。

図-6は、全盲者を、先天盲、後天盲、男、女別に、傾向をみてみたものである。すなわち、男女いづれを問わず、先天性の盲人に比べ、視覚的経験をもつ後天性の盲人に、高い志向性が認められ、興味の度合いが理解される。特に、後天盲男子では75.1%と、高い比率である。

図-5、図-6いずれからも、盲人女子が盲人男子に比較して、戸外活動に対する消極的な態度をもつことが理解されるが、この傾向は、盲学校高等部から、さらに

高年齢の盲女子になるほど顕著となっており、戸外に出る機会を、非常に少なくしている。

(b) 戸外での遊び

図-7は、盲学校の幼稚部、小学部、中学部の生徒を対象に、日常生活の中での好まれる遊びについて、調査したものである。遊びの種類を、感覚、受容、構成、運動、ゲーム、採集の6項目に類型化し、男女の特徴をみてみた。

図一8は、盲学校の小学部、中学部、高等部の生徒を対象に、盲学校の体育の授業の中から、好きな種目を選んでもらった結果である。

図一 戸外での遊び場（戸外活動の場）

図一 によると、幼稚園～中学部の盲児では、運動部門すなわち、盲人野球、ブランコ、ジャングルジム、すべり台、フットベースボールなど、全身運動が可能なゲーム、アスレチックへの人気が高い。

盲人女子も、男子と同様、運動部門に人気が集中しているが、内容的には、盲人バレー、フォークダンス、なわとびに、高い割合がみられる。その他、盲人女子の場合、男子に比べて、感覚、受容、構成、ゲームの各部門にわたって、好みが強くなり、幅広いものとなっている。

図一 8 では、盲人野球23.3%、盲人バレー23.4%、盲人卓球9.7%といった種目が、極めて高い比率を示している。すなわち、視覚障害者にとっては、1人で走る、歩く、動くよりは、チームプレイが要求される種目が好まれ、活動的で組織的なスポーツに、積極的な動きがみられるといえる。

特に盲人野球が好まれる理由としては、野球放送を聞く機会が多く、盲学校においても、野球ルールが、早くから、教材の中に取り入れられたことにもよるものと考えられる。

(c) 戸外活動の場

(d) 遊び場の概況

図一 9 は、視覚障害者にとっての、戸外での遊び場を

盲児から盲老人までの全盲者、準盲者、弱視者についてみてみたものである。

単数回答の結果であるが、彼らにとっての、日常生活における多くの遊びは、盲人施設、盲学校校庭を中心としており、自宅や、家の周辺の空地といった、身近な周辺空間に限られていることがわかる。このことは、特に、全盲者に高い割合となっている。

その他の遊び場として、農耕地、川原、土手、小川、海浜などのオープンスペースに、わずかにみられるものの、極めて低い割合である。

障害別では、全盲者に比べ、準盲者、弱視者になるにつれ、遊びの範囲が広がっていく傾向にある。

いずれにしても、彼らにとって、盲人施設以外では、十二分に運動し、思いきり遊べる場や生活環境が与えられていないといえよう。

又、こうした場が、戸外での活動の場として選ばれる要因についてみると、図一 10 の通りとなる。

まずは、彼らにとって、遊び仲間を得やすいことが、最大の理由となっている。このことは、自由時間における、彼らの戸外活動のほとんどが、集団的な遊びで占められていることから、容易に理解される。

次いで、盲人施設や自宅の近くであるという、地理的

図一10 戸外活動の場として選ばれる要因

図一11 戸外で遊ぶのに困ること

近接、又は、遊べる場所がわかりやすい位置にある等があげられる。

これらの要因は、彼らの行動範囲における安心圏として考えられる。

その他には、交通事故の恐れのない地、広い遊びスペースであること、あるいは、盲人の利用できる遊具施設等が、整備されていること等がある。

いずれの誘因も、全盲者、準盲者、弱視者共に、共通する要因となっている。

彼らにとって、日常生活における戸外での遊び生活は

基本的には、盲学校や盲人施設での友人との交友を伴って展開されていることがわかる。

視覚障害者にとって、戸外（盲人施設の庭、盲学校校庭を除く）遊びでの、阻害性の問題についてみてみたのが、図一11である。

阻害要因は、12種類が抽出されるが、遊び仲間がいないことが、全体の1/3以上の高い割合を占めている。その他に、自動車事故に対する恐れ、あるいは、障害物にぶつかる危険性、遊べる場所が狭い、適切な遊具がないこと等が、主要要因としてあげられている。

(四) 戸外活動の領域

図-12は、全盲者を対象にみてみた、遊び半径（遊びの領域）である。その内訳は、福岡県内の盲学校（盲男子32人、女子12人）、国立視力障害センター（盲男子43人、盲女子17人）、盲老人施設（盲男子11人、盲女子12人）

図-12 遊 び 半 径

人）である。

彼らの、日常生活の中での、戸外遊び場を、観察、聞き取り調査から図化したものである。

盲老人施設、視力障害センター、盲学校と、それぞれの盲人施設を中心に、戸外で遊ばれている所を、各施設からの直線距離でみてみたものである。

各盲人施設により、遊び場は異なるが、いずれも、身近な場が選ばれていることがわかる。

図から、盲学校生徒に、やや領域の拡がりが見られるものの、遊び場の大半は、100m内の距離圏となっており、特に、50m圏内が全体の8割以上を占めている。直線距離で、200m以上離れた場所で遊ぶ例は少ないといえる。

彼らは、多少、広いスペースを要する遊びでも、近い所を求めて、遠出しないということになる。この傾向は全盲者の中でも、先天性の盲人に、高い割合が示されている。

(イ) 余暇時間保有量と遊び半径

視覚障害者の、戸外における遊びの行動圏を、彼らの余暇時間との関連からみてみたのが、図-13である。

彼らにとって、平日では3時間、休日においては8時間前後が、それぞれ、余暇利用の時間とみられる。

図からわかるように、余暇時間の保有量が、彼らの、屋外での活動領域の拡大に、直接影響を与えることは少

図-13 余暇時間保有量と遊び半径

ないといえる。

4. おわりに

視覚障害者が、快適に適応できるような、屋外での遊び空間、安全な運動の場形成の、計画指針を得る目的でデーターを収集した。

盲人の趣味、余暇時間の使い方、戸外活動に対する意識、屋外での遊びの種類、戸外活動の場、遊びの行動半径等について、点字調査の結果から考察したが、彼らの戸外活動への志向性は、極めて高いことがわかる。

特に、盲学校生徒では、盲人野球、盲人卓球、盲人バレーといった、組織的で活動的なスポーツが好まれる。

しかし、盲人女子、あるいは高年齢の盲人になるほど戸外活動に対し、消極的な態度がみられ、室内での遊びが多くなり、音楽、読書、手芸、あるいはラジオ、テレビを中心とした生活が、考えられる。

障害別では、先天性の盲人に比べ、後天盲者、準盲者、弱視者と活動範囲が広がり、遊びの種類も多くなっている。

しかしながら、戸外での運動、遊びに対する興味、関心度は高いものの、積極的な余暇時間の活用はみられず、余暇活動として発展していない。特に、盲人女子に、その傾向が強いことがわかる。

彼らの活動の場としては、盲人施設、盲学校校庭を中心に、基本的には、友人との交友を伴って、展開されていることが理解される。

視覚障害者にとって、これらの特性を十分に考慮し、彼らの特徴に立脚した諸施設の整備が進められることが必要である。そうすることによって、彼らの生活行動圏も、拡大されるといえよう。

なお、本研究の一部は、昭和58年度、科学研究費補助金の助成を受けたものである。

(1984.5.27受付, 1985.2.2受理)

Summary : In order to carry out the project of the park for the blind, it is essential to collect the fundamental datas about the utilization of this park. Hence, now our main objective is to collect these datas.

In the center and the school for the blind, we investigated the out door plays with the view to know the things such as: hobby, physical exercise, and the condition of their joining club.

From this investigation, we were able to know the fact that the blind is eager to play in the open air.

In the class of elementary education, they like jungle jim, swing, and so on, which indicate a rythmical element and a sense of touch.

In the class of secondary and higner education, most of them are interested in sports. As the systematic sports, they are fond of baseball, volleyball, and ping-pong for the blind. And generally boys like baseball, and girls like volleyball.

As for the grown-up blind, who can't see at all, tne male like not only ball games but also bowling, swimming, mountain-climbing, and the female are fond of sports such as volleyball, gymnastics, walking, and so on. But, on the other hand, the older they are the more they tale a negative atitude, and stay indoors, which means to spend a day, generally in reading, music, handicraft, and watching television.

The oldest blind has a tendency to spend time in walking and ball games only for the old, and mainly plays in the places such as the ground of his school and the open space with his friends rather than by simself.